



## いまに活きる戦国の遺訓

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



岡崎城は、家康公の祖父・松平清康公が奪取し、改修拡張整備。家康公は岡崎城で誕生。(写真提供：岡崎市)

戦国時代は、それまでの日本に連綿として存在してきた権威が破壊され、新しいものに入れ替わった激変の時代でした。下克上の大波の中で、乱世を實力で乗り切り、自分の領地を完全に支配して、少しでも弱い相手を斬り従えて勢力を拡張する新しいリーダー「戦国大名」が登場します。

新しいリーダーたちは、新しい能力(器量)を持つて台頭します。大久保彦左衛門は『三河物語』の中で、将に求められるものとして次の三点を挙げています。一、武辺。戦闘に強く、的確な状況判断をもって勝つ、また負け戦を回避する器量。二、直属の部下、または指揮下に入ってくる友軍に対して深く情けをかける器量。三、領民、百姓、さらに敵方に対しても深い慈悲の心を持つ器量。

この三つの要素は、松平家(徳川家)では「三引き付け」と呼ばれ、

家康公の曾祖父、松平信忠公が子孫に対して、この三つのうち一つでも欠けては「御家は立つまじき」と書き残した徳川家の家訓です。現代の会社経営に引き直せば、優れた経営判断能力、社員とその家族に対する深い情けの心、社会に対する思い切った貢献がなければ会社は永続できないと言っているわけです。

朝倉家の家訓には「もし領国の行政を司っている役人がどんなに些少であっても私利私欲のために動いていることが判明したら、固く罪に申しつける」というものがあります。

北条家の家訓には「お城勤めをさせるとポーツと牛みたいだ。大膽に戦う。だから平時に、この者は役に立たない。つけ者よと見限ることは、大将としては浅ましい狭い心である」とあります。

戦国大名という新しいリーダーたちは、自ら生き抜くためにも、自らの出処進退を明らかにして、部下の武士たちと領民全体の厚い信頼を勝ち取ることが何よりも重要でした。

戦国を生き抜いた彼等は領国経営の指針として儒教を読み、自らの経験と信念を「家訓」として子孫に伝えました。実践の経験と儒教の考え方によって出来たこの時代の理念は、平和な江戸時代にそのまま引き継がれ、あるときは「武士道」と名前をかえ、農工商の指導者たちの勤勉、社会貢献、質素儉約を大切にすると云う家訓としても生きていました。

そしてこの精神は、近代に入ってから日本のリーダーたち、企業経営者の理念に繋がりを、日本の近代の発展の精神的基礎を形成していったと、私は考えています。